

## 「天気」の参考文献の表記について

「天気」編集委員会

この度は「天気」の参考文献の表記について、松山会員より「会員の広場」欄に貴重なご投稿をいただきありがとうございました。本誌9月号の松山会員の「海外だより」(天気, 40, 669-676)の印刷に関しましては、松山会員をはじめ、読者の皆様にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。訂正箇所については、すでに本誌11月号830ページに記載いたしましたので、ご参照いただければ幸いです。以下では今回の件の経緯を説明させていただくと共に今後の改善策について回答させていただきたいと思っております。

今回松山会員からご指摘いただいたように、参考文献は読者が本文に関連する内容について更に深く調べる際の貴重な情報ですので、参考文献が辿れないような表記は意味がありません。しかしながら、一方で参考文献を全文表記すると同じ雑誌名等が何度も登場するなど、貴重な誌面を不必要に使うことにもなりますので、「天気」ではなるべく短い表記を採用しています(投稿規定参照)。例えば、巻と巻全体の通しページがある雑誌の号番号は省略しています。

今回、明記しないと参考文献を辿れない号番号まで削除してしまったのは、編集担当が最初の校正の段階で、号番号の記載の必要性の有無を十分考慮せずスタイルの統一を図ってしまったため、編集委員会としては大変申し訳なく思っております。そもそも、本来ならば、著者が校正済みの原稿に手を入れることは許されないことです。

しかしながら、今回のような誤りが起きたのは以下のような事情による部分があります。これまでの経験によりますと、著者校正が終わった後でも、編集担当は本文中にいくつもの誤植を見つけることがあります。特に参考文献は、誤植も多く、スタイルも投稿規定から大きくはずれたものが少なからず見受けられます。編集担当はこれらの誤りを正すべく、極力著者

に問い合わせたり、時間の許す限り参考文献を辿ったりして、2回目の校正に反映させています。しかし、著者に連絡が取れない場合もあり、すべての参考文献を確認することは、月刊誌という制約上、時間的にも不可能なこともあります。従って、極く稀にはありますが、著者に確認をとらずに参考文献などのスタイルを変更することが起きてしまいます。

今回の松山会員のご提案を踏まえ、前述の通り急遽11月号に訂正を掲載いたしました。再度「天気」編集委員会で検討した結果、なるべく表記が短くなるよう、来年から投稿規定の執筆要領の中で参考文献の表記方法を以下のようにすることにいたしました。

雑誌の巻、号、ページについては、各巻別にページが振られているものは号を省略して巻とページを、各号別にページが振られているものは巻・号(カッコで括る)・ページを記す。

今後は、編集委員会でも、参考文献に登場する雑誌の巻、号、ページがどのようになっているかを予め調べてリストにしておき、極力このような誤りが生じないようにしたいと考えております。また、著者校正時に、著者の方に注意していただきたい点などをまとめた「校正の手引き」をお送りできるよう、準備を進めたいと考えております。

誤植の多い原稿や、投稿規定に合わない原稿は、著者と編集担当の双方が校正に想像以上に多くの時間を割くこととなります。また、不十分な著者校正は印刷の誤りにも通じかねません。松山会員による大変有益な「会員の広場」のご投稿を契機として、編集委員会では「天気」をより良くするために、なお一層の努力を払って参りますが、著者の皆様にも編集作業へのなお一層のご協力をお願いする次第です。